

安全保障関連法の運用で自衛隊の「国際貢献」も一変してきます。そもそも平和憲法にかなう国際貢献とは、伝統的救助隊に重んじて原点をたどりませう。

# 論説

2015・10・25

待ちわびた往年のファンも多かったでしょう。今月からNHK総合テレビで始まった「サンダーバード ARE GO」(毎土曜日夕)は、不朽の人形劇版が英国で一九六五年(日本は六六年)に初放送されて五十周年を記念した新シリーズです。時代設定は二〇六〇年の近未来。トレーシー一家五兄弟による「国際救助隊」の活躍が斬新なアニメ版で盛り込まれた。

非軍事でいかなる国家にも属さず、支援も受けない。あらゆる難事も分け隔てなく地球を守るという究極の国際貢献。サンダーバードの衰えない人気の一因は、この誰にも分かりやすい政治的中立の精神にあるのかもしれない。

今日、安保法が成立した日本では、自衛隊の活動範囲が海外派遣や武器使用において一気に広がります。安保法の源流をたどれば「じつ」は一九九二年、カンボジアの国連平和維持活動(PKO)で自衛隊の本格的な海外派遣に道を開いたPKO協力法に行き着くでしょう。冷戦後、日本の国際貢献の「翼」を自衛隊が担うことになった大きな岐路でした。

安保法と同様、「道徳」「世論」が渦巻く中、PKO協力法が成立した直後、協力法に反対する若手憲法学者らが出た本が監視「話題」を呼びました。

『ママはサンダーバードを知っているか—もう一つの地球のまもり方—』(サンダーバードと法を考える会編、日本評論社)

## 国際貢献と専守防衛

編集を主導した水島朝穂・広島大助教授の当時、現早稲田大教授が巻頭で強調したのは、憲法前文の「平和のうちに生存する権利」の対象が、日本国民のみならず、「全世界の国民」に等しく向けられていることだ。平和憲法下の日本だから「ママ」も「パパ」も「平和的国際貢献」があるのだ。

## 安保法を問う

から、地球全体を守る志を問いかけてもよい。自衛隊に頼らない国際貢献なんて。安保法下の今では、ほとんどの空疎な非現実論と、取り合わない人もいるでしょう。

しかし、思い返すまでもなく、自衛隊はもともと専守防衛です。海外に出ることで、その一線を越えて、道徳の「武力行使」につながることを考えたのが、私たちの平和主義の原点だったはずだ。

現にPKO以前、海外の被災地に派遣される国際緊急援助隊(八七年法制化)の構成から、自衛隊は当初外されてきました。それは日本の国際貢献に、非軍事の「サンダーバード精神」が宿った一時期でした。同時に、自衛隊の海外派遣に当時の人々が抱いた強い忌避感の表れでもあります。

いま思えば、問題のPKO協力法でも、武力行使とのそりを受けないよう、一定のタガがはめられていました。

こつこつとギリギリ守り続けた平和主義の抑制も、しかし今回の安保法成立で水の泡です。しかも政府は成立直後から、法律の初運用で、南スーダンPKOの任務に「駆け付け警備」を追加する検討を始めています。

PKOの国際舞台で、実際には二十年以上武器を使わず、信頼を積み上げて自衛隊が、文民救出などの際に武器を使える部隊に発展します。無論、戦闘でも参加込まないやむを得ないでしょう。

あのサンダーバード精神に立った平和的国際貢献の理想に照らせば、おおよそ対極の「武力行使」の域に足をかけた自衛隊の現実です。

「国際貢献」のPKOがなぜ、ほかの沿岸の「駆け付け警備」にまで流れ着くのか。私たちはやはり平和主義の原点に立ち返って、この巨大な乖離を肝に銘じておかなければなりません。それが、安保法の運用にあたって、政府のなし崩しを阻止とせよ力にもなるはずだ。

# 甦れサンダーバード

## 2040年「地球戦争」

さて十七日、新シリーズの第三話は、宇宙特捜隊サンダーバードの母艦を操る未だマジンガー、宇宙「M」の中心に燃える追従型機雷の除去に苦闘する話でした。この宇宙機雷は、二〇四〇年に起きた「地球戦争」の遺棄土産だったとか。

四半世紀先の次世代に「地球戦争」が起きると、戦争につながる火種を減らすため、現世代がなすべきこと。本誌はそれだが、今の日本政治が取るべき真の国際貢献の道なのでしょ。